



TITLE:

京都帝國大學天文部だより : 二助教授に學位與の事

AUTHOR(S):

CITATION:

京都帝國大學天文部だより : 二助教授に學位與の事. 天界 1929, 9(102): 461-463

ISSUE DATE:

1929-08-25

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/161457>

RIGHT:

京都帝國大學天文部だより

二助教授に學位授與の事

去る七月三十日、當教室の上田荒木兩助教授（共に目下外遊中）は論文提出によつて理學博士の學位を得られた。下に其の論文審査要旨を掲げる。（但し、紙面の都合上、荒木氏の論文審査要旨は次號にまはす。）

上田穰學位請求論文審査要旨

本論文は「東洋に於ける最古の星表なる石氏星經に就て」と題する主論文（英文）、及び「石氏星經の研究」と題する参考論文（邦文）の二編より成るものであるが、参考論文は著者が研究の進捗に應じて逐次其の過程を記述したもの、又、主論文は研究の全部完了せる上にて其の過程を整理し、研究方法の大要と結論の大體とを要約せるものと思はれる。兩者を通覽すれば著者の研究は

- (1) 開元占經に引用せる石氏星經の吟味
- (2) 石氏星經の復現
- (3) 石氏觀測當時に於ける北極位置の決定、從つて其觀測年代の決定
- (4) 石氏星經と近代の觀測との比較

等の數節に分れるのであるが、第一節「開元占經に引用せる石氏星經の吟味」は蓋し著者の最も力を致せる所であらう。唐の開元年間（西紀 713—741）の書といはれる開元占經には、黃道二十八宿、及び石氏中官六十二座（内六座缺）、石氏外官三十座、合計百二十個（内六個缺）の星座に關して、石氏の觀測なるものを引用し、各星座中の距星（基準に採れる星）に就て、其の入宿の度、即ち其の方面に於ける二十八宿の宿の初點（距星）より測りたる赤經の差（二十八宿に就ては距星と次の宿の距星との間の赤經の差を其の宿の廣さとして記して居る）、去極の度、及び黃道内外の度数（黃緯）等を記載して居るのであるが、著者は是等の記録中、度数に關しては多少強弱等の度の端數の記載法の解釋如何、又長き傳來の間に數

字を誤寫せることの有無及び其影響如何、星座の名稱及び距星に關しては其古今異同如何等に就き一々詳細なる吟味を試みて居る。特に星名の照合に關して、舊唐書、宋兩朝天文志、元史、靈臺儀象志、儀象考成等に於ける觀測記錄、及び宋淳祐年間に成れる石刻天文圖等を對照して古今の異同を斷じて居るのは頗る傾聽すべき研究である。斯くして第二節に於ける所謂石氏星經を復現し得たるは貴重なる功績と言はなければならぬ。著者は更に一步を進めて第三節に於て該星級中去極度数の記載を利用して、觀測當時に於ける北極の位置を決定し、從つて該觀測の年代を決定せんことを試みて居るが、これがために著者の用ひたる圖式解法は、此場合に於ける如き粗雑なる材料の處理方法として最も適切なるものといふべく、著者の成功は全く其方法の選定宜しきを得たるがためであると言はなければならぬ。其結果として、星經記載の度数に相當する觀測年代は、紀元前三百六十年頃と紀元後二百年頃の二つなるべきことを確かめ得たるは、歷史上既知の事實と相對照して甚だ重要なる成果と言はなければならぬ。著者は動もすれば先入の見解によりて偏倚の處置に陷るの危險あらんことを慮かり、或は故らに文獻上既知の事實を引用することを差控へたのであらうと思はれるが、言ふまでもなく、前者は普通に魏の石申の時代なるべしといはれて居る時代に、後者は後漢末乃至三國時代に陳卓若くは其一味の人々が古來の觀測を一應整理したであらうと想像されて居る時代に該當して居る。第四節に於ては、既に照合し得たる石氏の星に對し、現時の觀測によりて知り得たるものを基礎として、右に推定したる如き年代までに溯りたる時の位置を推算し、これを石氏星經記載のものに相對照せしめて居るので、此對照表に於ける一致不一致及び差違大小の程度は要するに本論文に於ける研究の總勘定を示すものといふべく、又石氏星經なるものが古代の觀測記錄として何程の價值を有するかを明示するものである。

之を要するに著者は獨特の精密なる研究によりて所謂石氏星經なるものを復現し、しかも其内容によりて其當初觀測の年代が大約紀元前三百六十年頃なるべきことを決定し、斯くして東洋最古の星經を世に出したる功績は學界を裨益する所尠なくない。よつて著者上田穰は理學博士の學位を授

けらるべき資格あるものと認定する。なほ本論文の審査に當りては、審査員教授新城新藏は其教授在職中これに参加したることを附言する。

昭和四年七月

審査員 教授 山 本 一 清
同 桑 原 隲 藏

神 戸 支 部 近 況

幹事 神戸西須磨關守畔 改 發 香 嶋

久しく中絶して居た神戸支部の集會を去八月三日（第一土曜日）午後七時に開催した。會員其他合せて二十六名出席。（神戸支部内及び當市附近の會員諸君に告ぐ。前記の通り毎月第一土曜日を期して例會を拙宅で開きますから成るべく御出席下さい。因に同日は京都の何方かが御出席下さる事になつてゐます。）

同日は京都の中村要氏が出席され、席上、去五月九日スマトラに於ける皆既日蝕の觀測談があつた。珍談あり、奇話あり、失敗談あり、ミ云ふ頗る面白く有益なお話で一同満足した。何分此の頃の暑氣烈しい折柄であるのミ、殊に内輪ばかりの會合であるので、中村氏の諒解を得て、樹間、星を頂く露天に椅子を列べ、シャツ一枚の輕装で、涼風をこりながらの集會で、大へん愉快的會合であつた。

土星や二重星や星團杯の美しい天空上の現象を望遠鏡裡に納れて實地觀測をした。15センチ屈折望遠鏡の對物レンズも此の日漸く完成したので、之れに依つて諸氏の自由觀測にまかせ、又、會員森田氏は業々8センチ反射望遠鏡をかついで出席されたので、之れに依り大へん便益を得、皆大悦びであつた。

七月中には小學校の生徒が百五十名ばかり太陽黑點の觀望に、又月夜は毎夜七八名の觀望者を迎へて可也いそがしい思ひをしたが、愉快に仕事をした事を悦んでゐる。